



神聖かまってちゃんとインターステラー

特異点を観測する者たち

リュミエール兄弟が世界最初の映画上映会を行った1895年に、フロイトは精神分析の誕生を告げる『ヒステリーの研究』（プロイラーとの共著）を出版した。

映画と精神分析は同じ年に生まれたのだ。

↓

したがって私たちは、映画を観ると同時に、
精神分析も見ているのだ。

ベンヤミンはエッセイ『複製技術の時代における芸術作品』（1936）において、↓

ベンヤミンはエッセイ『複製技術の時代における芸術作品』（1936）において、映画の手法と精神分析の手法を並行的にとらえている。彼によると「精神分析により欲動的無意識について知ったように、われわれは、映画によって初めて視覚的無意識について知る」らしい。

ちょっとむずかしい…。

それを思想家の東浩紀はこう解説する。↓

東浩紀はこう解説する。

たとえば、会話中のちょっとした言い間違いは、日常的な処理速度では聞き逃されてしまう。しかし、精神分析はそれを拡大し、分析することで、通常のコミュニケーションとは別に存在する深層構造を浮かび上がらせることに成功した。その着眼点の移動は、もはや量的なものではない。精神分析的な「細部」の発見はむしろ、コミュニケーションの捉え方そのものを変貌させてしまう。ここにフロイトの偉大さがあった。

同様のことが映画にもいえるだろう。映画はスローモーションあるいはクローズアップによって、視覚的細部を発見する。わたしたちは歩くことができても、じっさいどのように歩いているかどうかは知らない。ところが、カメラはその「どのように」、すなわち、視覚的な無意識を明らかにすることができる。その発見は精神分析と同様に、わたしたちの世界認識の構造を変えてしまうだろう。

「人間によって意識に織り込まれた空間の代わりに、無意識的に織り込まれた空間が現れる」。つまり、映画と精神分析に共通する特徴は、情報処理密度の量的変化により認識の質的变化を達成する手段にあった。

映画「インターステラー」は↓

映画「インターステラー」はわたしたちの映画だった。



映画「インターステラー」はわたしたちの映画だった。

あらすじはこうだ。

近未来、地球は大規模な環境変動により砂の惑星になりつつあった。砂が吹き荒れる環境では植物もまともに育っていかない。このままでは光合成が行われず、食料戦争よりも前に酸素が不足して人間たちは窒息死するだろうといわれていた。人類はこの環境悪化を食い止めることはできずにいた。

土星の近くに別の銀河へ繋がるワームホールが突然現れる。主人公であるクーパーは幼い娘（マーフ）を地球に残し、女性飛行士アメリア以下数名とともに人類が移住できる星を探す旅に出る。

この「インターステラー」はボンクラ映画だ。↓

この「インターステラー」はボンクラ映画だ。

地球で食料不足、酸素の不足で死を待つしかないというのはわたしたちボンクラのことである。



地球で食料不足、酸素の不足で死を待つしかないというのはわたしたちボンクラのことである。教室の隅っこでただ呼吸してるだけで休み時間がすぎるのを待つしかない棒。

われわれを救おうと移住できる星を探しにワームホールをくぐるのはロックバンドだ。

↓

われわれを救おうと移住できる星を探しにワームホールをくぐるのはロックバンドだ。

宇宙船から地球へ、われわれが住めるような星の情報をビデオメッセージで送るのは楽曲である。わたしたちはそれを受け取って、ちゃんと届いてるかも不確かなファンレターやネットでの投稿を行う。それはマーフたちが行っていた地球から宇宙船へ送るビデオメッセージにとらえることができる。

そう。彼ら星から星を渡り歩いていくインターステラーたちはロックバンド。彼らのメッセージを待つ地球人がわれわれなのである。

しかし、はっきりいって、そんなインターステラーなバンドならゴマンという。

しかし、はっきりいって、そんなインターステラーなバンドならゴマンという。神聖かまってちゃんがなぜ現代で他のバンドたちよりも頭3つ分抜きに出ているかがこの映画に描かれている。



物語の終盤、クーパーは自身の宇宙船を↓

物語の終盤、クーパーは自身の宇宙船を推進力とし、アメリアの乗る宇宙船を移住最後の望みある星へ飛ばす。アメリアはその星に先に探査にいった恋人の存在を感じ、呼ばれているような気がするとかつて口にしていたのだ。クーパーも地球に娘を残しているのものでその感覚を理解できたから、最期的手段でアメリアを恋人のいる星へ飛ばした。



推進力を失うクーパーの宇宙船はブラックホールに吸い込まれてしまう。

↓

推進力を失うクーパーの宇宙船はブラックホールに吸い込まれてしまう。人類を救う方法はじつは2つあった。1つは移住できる星を探すこと。もう1つはブラックホール内部の特異点とよばれる場所を観測・数値を記録して、人類が宇宙で暮らせる科学技術理論を得ることだ。

しかし、ブラックホールに吸い込まれて生きて帰れないだろうし、もし観測・記録できてもそれを地球に送ることはできないとされていた。



ブラックホールの内部に突入したクーパーは時空の歪みを体感する。↓

ブラックホールの内部に突入したクーパーは時空の歪みを体感する。人工知能ロボットに特異点の観測・記録を指示。しばらくして時間軸をすべて見れるふしぎな空間へ出る。

そこで自分が娘と別れを告げた場面を見つける。



↓

ワームホールを作ったのもブラックホールの内部に入るようにしたのも「彼ら」と称される肉体のない五次元宇宙の者たちが人類を救うためにやったことだったのではないかとクーパーは推測するのだった。

人工知能ロボットは特異点を観測・記録している。しかしクーパーはその時間軸の空間にいるので娘のいる3次元の空間に物理的に干渉することができない。

試行錯誤した結果、ある方法で娘のマーフに伝えようとする。

具体的なことは避けるが、↓

具体的なことは避けるが、アメリカが遠く頼りのない恋人に感じていた「愛情」としか言い表せられない繋がりを感じ、マーフは娘のマーフに感じ、マーフもクーパーに感じていた。クーパーは愛は数値化して観測できるはずなんだといい、死にかけて地球にいるマーフに伝える手段を探すのだった。

神聖かまってちゃんは特異点の観測者である。↓

神聖かまってちゃんは特異点の観測者である。

アメリアは恋人がいる星へ発った。恋人がいるところへ行くのだ。これは、恋愛の歌を歌う者・消費するものの象徴である。アメリアは人類が安住できる星を恋人のいるそこにみている。

つまり、アメリアは一般的・大衆的な人たちを救おうとする者なのだ。ゴマンというロックバンドやJ - P O Pの歌手たちにそれは象徴される。

一方、クーパーはちがう。↓

一方、クーパーはちがう。

一般・大衆を救うことをアメリカに託して、じぶんはべつのところへいく。

真っ暗なブラックホールの特異点だ。

↓

その闇に突入して数値を観測、それをマーフに伝えようとする。

これは、一般・大衆を救おうとするのは他のバンドや歌手たちに任せて、自分のメッセージを必要としている全国の死にかけのボンクラたちのために楽曲をつくる神聖かまってちゃんに例えられる。そのためには自らブラックホールともいえる闇のなかに突入してボロボロになりながら特異点を観測する必要がある。

特異点とは、ボンクラの心を救う核みたいなものだ。

アメリカとクーパーが対比・象徴↓

ここまで、アメリアとクーパーが対比・象徴していたものをまとめる。

移住先を探すアメリアは「環境を移す」ことによってその人間を救うということに対して、特異点を観測しようとしたクーパーは「文学（思想）」によってその人間を救おうとしたと考えられる。



クーパーがマーフに対する愛を観測↓

クーパーがマーフに対する愛を観測・数値化することによって、物理的干渉ができないところからマーフにメッセージを伝えようとするのは、こちらでいう楽曲のことだ。

たとえば、音楽も手に触れられないから物理的干渉はできない。そもそも音楽というのは、哲学から思考されて数学から生まれたという。その点でもクーパーが「愛を数値化して、伝えるんだ」という考えと音楽は共通する。

五次元空間の存在「彼ら」と呼ばれるそれは、↓

ワームホールを作ったり、クーパーに時間軸を行き来できる空間をクーパーに用意した五次元空間の存在「彼ら」と呼ばれるそれは、過去偉人たちが蓄積してきたロックンロールのノウハウにみてとれる。ここでいうノウハウとは、コード進行であったり莫大なアレンジ、メロディーやソングライティングのコツだ。その残されたノウハウが現代に生きるわたしたちに助けやヒントを教えてくれる。

映画でいうなら、クーパーはそのノウハウにちょっと力を借りることで、地球出発前にケンカしたまま別れたマーフに、物語終盤、時間を超えてメッセージを伝えることができたのだ。

つまりこ↓

話がすこしそれた。つまりこうだ。他のバンドたちは移住できる星をめぐって観測し、地球の人間にそのメッセージを送っている。

神聖かまってちゃんは捨て身でブラックホールの内部の特異点を観測して、それゆえにいびつな形になるけれど絶対に心の核心を突く。↓



朝いつもの電車に乗れば

特異点を観測する(してしまう)者がロックンロールだ。

今ならば神聖かまってちゃんのの子と大森靖子にぼくらはぼくらの未来を托すしかない。彼彼女らはインターステラー。←

うおお

神聖かまってちゃんとインターステラー ――特異点を観測する者たち

<http://p.booklog.jp/book/93152>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/93152>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ